

くろしず
あっぱ

今年もいっぱい幸せをもらったよ。新たな年も幸せな年にしようね。

口にくわえた鉛筆で輪郭を描き、妻の智秋さん(48)の手を借りて色付けした後、生きる喜びや感動をつづった詩を最後に添える。1枚を仕上げるとまでに1週間ほど要する。

本格的に絵を描き始めたのは約10年前。綾瀬市内で活動する画家の指導をあおいだ。結婚を機に、自分を支えてくれた人への感謝を伝えようと思ったのがきっかけだった。

高校2年の時、体操の練習中に鉄棒から落下して首を骨折し、首から下が動かなくな

った。

くわえた絵筆で水彩画を描く 金子 寿 さん 49

生命の輝き 花の絵に



リハビリ。決して回復しないことを思い知り、生きる意欲を失った。自殺も考えた。「手も足も動かず、死ぬことすらできなかった」

だが、懸命にリハビリを続ける仲間たちの姿を見ているうち、「本来は事故でとっくに死んでいたかもしれない」

と気付かされた。せっかく取り留めた命、何ができるかチャレンジしたい――。

1985年に障害者の自立支援組織を発足させ、これまで15か国以上に車イスを寄贈。活動の一環としてマレーシアやアメリカなどを見聞し、口にくわえた棒でキーボ

ードを押しながら体験記も執筆した。障害者のスポーツ大会に出場し、電動車イスの競技で優勝したことも。最近では市内の小中学校や大学などで年20回ほどの講演をこなす。絵の題材は「花」が中心。「生命の力強さと美しさを感じる」からだ。ベッドに備え

付けたテーブルに、智秋さんと出かけた際に撮影した写真や、自宅の花壇などで育てた花を置いて描く。二人三脚で描いてきた作品は100枚を超す。

新たにコチヨウランを描き始めた。「幸福の飛来」という花言葉を持つ。絵に割ける時間は昔ほど多くはないが、作品を通して、自分の言葉が相手の心に届いていると実感できるのがうれしい。

「自分自身、あきらめないで生きてきたから色々な人に出会うことができた。『あきらめないで良かった』と思える日が必ず来る」。これからも個展や講演を通じて伝えていくつもりだ。

(松山翔平)



金子さんの作品

綾瀬市深谷の市中央公民館2階「レストラン綾瀬」で、金子さんの5度目の個展「心で描く花のうた展」が開催中。6月30日まで。